

「お年寄りを助け起こす羅生門」問題のクレーム申し立てへの考察
—新聞記事の計量テキスト分析からの試み—

婁 静*

The study on the claims-making of the “help the elderly” problem:
Through the quantitative text analysis of the newspaper articles

LOU Jing

Abstract

This paper aims to clarify how and why the “help the elderly” problem has been considered a social problem in mainland China during the past several years. From a constructionist perspective, social problems are defined as a claims-making process where claims-makers attempt to argue that particular condition should be recognized as troubling and thus should be addressed. This paper focused on how the claims of this problem have been constructed by examining the claims’ rhetoric using the grounds-warrants-conclusions structure. Through the quantitative text analysis of the 249 newspaper articles concerning the problem, we found the results as below.

For identifying the problematic conditions, repetitious use of phrases like “no one dares to help” and the mention of typifying examples are remarkable. For explaining why the conditions are troubling, the claims suggest that the conditions violate Chinese traditional virtue of helping others as well as the Core Socialist Values. The conclusions presented in the claims are rather ideological slogans like “we should help the elderly in emergency situations” than the proposal of concrete solutions. The rhetoric above, especially the ideology-oriented characteristics of the claims made the problem widely accepted as a social problem without encountering counterclaims during the social problem process.

Keywords : the “help the elderly” problem, social problem process, claims-making, rhetoric,
quantitative text analysis

1 はじめに

1.1 問題背景

近年、中国のネットでは「お年寄りを助け起こす羅生門」という問題が盛んに議論されてきた。道に倒れたお年寄りを助け起こした人が逆に加害者だと訴えられたことがしばしばニュースに出るのがこの議論の背景である。これらのニュースでは、当事者双方がそれぞれの言い分を主張して真相が解明できない事例がほとんどであるため、ネット上では黒澤明監督の映画『羅生門』をもじって「お年寄りを助け起こす羅生門」と名付けて揶揄している。(叙述上の便利さを考え、以下は「羅生門」問題という略称を使用する。)

その議論の中では、2006年に中国南京市に起きた「彭宇事件」¹⁾が「羅生門」問題の元祖事件と考えられている。それ以来、転んだお年寄りを助け起こすことには陥られるリスクがあるという論調が広まるようになった。一

キーワード：「お年寄りを助け起こす羅生門」問題、社会問題過程、クレーム申し立て、レトリック、計量テキスト分析

*平成30年度生 人間発達科学専攻

方、お年寄りが転んで誰も助けられないというニュースも続々と出て、助けられないという現象に対する道徳面での批判ないし中国社会の道徳崩壊や信頼崩壊といった指摘も現れてきた。様々な議論が交わされている中で、倒れたお年寄りを助け起こすかが社会的難題のように思われ、「羅生門」問題も社会問題として人々の関心を引き起こした。

1.2 先行研究

これまでの中国国内における「羅生門」問題をめぐる研究を整理してみると、法律や制度、道徳、メディア報道という3つの側面からの研究が多い。

法律や制度面からの研究では、「羅生門」問題は中国の民事訴訟をはじめとする法律の不完備および裁判手続きの執行における不適切さを顕現化させ、問題を解決するためには法律制度の改革が必要だという主張が多い(赵海龙 2013、宋盖峰 2016)。

道徳面からの研究では、「羅生門」問題は中国人の道徳低下や中国社会の信頼問題など道徳面での問題を表しているという主張が多い(張莉 2014)。

メディア報道の側面からの研究は、「羅生門」問題に関するメディア報道の特徴に焦点を当てている。例えば、何晓惠(2016)がインターネットで収集した「羅生門」問題に関する記事に対して、内容分析とテキスト分析を行った。具体的な分析手順は明記していないが、結論としては「羅生門」問題に関するメディア報道において、ポジティブな用語よりネガティブな用語が多い、事件報道では道徳フレームの使用が多い、現象への批判を強調して事実への報道が少ないといった報道バイアスを指摘した。

1.3 問題提起

先行研究では、法律や制度面の研究と道徳面の研究はいずれも「羅生門」問題を既成問題として問題の原因と解決策を検討している。しかし、救助者が陥れられたり、転んだお年寄りを助け起こす人がいなかったりすることはけっして近年になってはじめて現れたわけではない。昔から存在してきた現象が今更社会問題とみなされるようになったのはなぜだろうか。現象の規模が昔より大きくなったからと簡単に説明すれば、その説明への検証が難しい。この場合、社会問題への捉え方を変えて、社会問題を「何らかの想定された状態について苦情を述べ、クレームを申し立てる個人やグループの活動である」(Spector and Kitsuse 1977=1992:119)という構築主義の立場で捉えると、問題関心は社会問題だとされた状態の真偽に関知しなくなる。状態そのものよりも、その状態がいかに社会問題とされるようになったのかという社会問題の形成過程への考察が研究の視野に入ってくる。

本稿は上述の構築主義の考え方を踏まえて、「羅生門」問題が社会問題とされた形成過程に焦点を当てることにしたい。上述の定義にしたがって社会問題をクレーム申し立て活動として捉える以上、クレームがいかに申し立てられたのかが重要な考察点になる。本稿は「羅生門」問題のクレーム申し立てへの考察を目的とする。

2 理論枠組み

社会問題をクレーム申し立て活動として考察する際に、社会問題の自然史モデルが役に立つ。このモデルは最初に価値葛藤派のフラーとマイヤーズ(1941)によって提案され、後に多くの研究者たちに継承、改良されてきた。その中でキッセとスペクター(1977=1992)が再公式化した四段階のモデルが代表的であり、近年ではベスト(2013)がより細緻化されたモデルを提唱した。

フラーらの自然史モデルによると、「社会問題は常に認知、政策決定、改革という自然史段階を通過している『生成中』の動的な状態にある」(Fuller and Myers 1941:321)。社会問題の具体的な発展段階に対する分け方は学者によって違うが、ここで重要なのは社会問題に関する基本的な考え方である。つまり、社会問題は常にダイナミックな発展過程にあり、この過程には異なる主体が参加し、それぞれの関心に基づいて問題クレームを解釈、再構築する。よって、必ずしもすべての社会問題は対応の政策が制定される段階まで発展するわけでもないし、対応策の実施によって社会問題過程が終わるわけでもない。「社会問題はその発展過程においてそれなりの実在、キャリア、運命を有し」(Blumer 1971:305)、その発展過程そのものへの考察=クレームが各段階に誰にどのように

解釈、再構築されたのかは自然史モデルの肝心なところである。

自然史モデルの理論枠によれば、「クレームは社会問題過程の第一要素である」(Best 2013:29)。社会問題の発展過程はいつも問題の創発=ある状態についてのクレーム申し立てからはじまっている。クレームメーカー(クレームを申し立てる主体)にとって最大の関心事は、ある状態を社会問題だと人々に認知させ、より多くの関心を引き起こし、さらに当該状態を改善してもらうことである。したがって、「あらゆる社会問題クレームは説得を目指した議論をする」(Best 2013:30)。そのため、クレームメーカーは常に聴衆の関心、感情、価値観などに合わせてクレームを組立て、修正しなければならない。なお、クレームメーカーとクレームの聴衆は同じ社会背景を共有しているため、クレームのレトリックは当該社会の社会・文化的コンテクストにも影響される。クレームのレトリックへの考察は、そのようなコンテクストを把握するための手がかりにもなりうる。

本稿は「羅生門」問題のクレーム申し立てに対して、具体的に①クレームの内容、②クレームのレトリックの全体的特徴、③この問題の社会・文化的コンテクストを考察する。

3 データと分析手法

3.1 分析データ

本稿は筆者が2016年12月末に収集した「羅生門」問題に関する新聞記事を分析データに使用する。このデータは中国最大の文献検索サイトCNKIで「中国重要报纸全文数据库」(中国の重要新聞全文データベース)²⁾から検索収集したものである。

検索方法としては、まず、「扶老人」(お年寄りを助け起こす)をキーワードに全文検索を行った。次に、その検索結果の中から、「扶老人」が「倒れたお年寄りを助け起こす(かどうか)」という文脈に使用されている記事を選別して収集した。

収集した記事は2008年から2016年まで計272件ある。データベースの特徴により、単純な事件報道に比べて問題に対する論評の記事がデータの大半を占めることになった。記事の期間については、2006年に「羅生門」問題の元祖事件が起きたが、検索結果においては2008年までに関連記事がなかった。収集時期が原因で2016年の記事収集には多少の漏れはあるが、最新の記事は12月26日までであるため、分析結果には大きな影響を及ぼさないと考える。そのうえ、検索サイトCNKIの2017年10月のシステム更新による検索結果の変動³⁾を避けるため、あえて補足収集を行わなかった。

このデータの適切性について以下の説明を行う。まず、ベストの自然史モデルに厳密に従えば、新聞記事は「メディア報道」段階のデータとして扱われる方がより適切である。しかし、「羅生門」問題はネットで始まった問題であり、その特徴を言えば、「クレーム申し立て」段階と「メディア報道」段階が必ずしもはっきりと区別できるとはいえない。勿論、新聞記事の中で、聴衆が受け入れやすいようにクレームの情報をパッケージして提示するなど、「メディア報道」段階の特徴が見られる記事もあるが、専門的なメディア従事者ではない個人によるクレーム申し立ての記事も多い。以上から、これらの新聞記事にクレーム申し立てのレトリック分析の枠組みを用いることは可能だと考える。

なお、SNS投稿やネット記事もクレーム申し立て研究のデータとして考えうるが、SNS投稿は収集が困難であり、ネット記事はデータのカバー範囲が不明確である。ネット記事には新聞記事の転載が多いことも考えると、出所無記載の転載が多いネット記事より、比較的明確な範囲を持ったデータベースから収集したデータの方が確実である。上述した問題の特徴とデータのアクセス・収集可能性を考え合わせると、新聞記事を以て「羅生門」問題のクレームの主な内容と全体的特徴の考察を行うことが可能かつ適切だと考える。

3.2 分析手法

本稿は計量テキスト分析のソフトウェアKH Coder (Ver.3.Alpha.13g)を使って分析を行う。KH Coderでは、分析対象のテキストを段落、文、語に分割して、文章を構成する基本要素である語を取り出すという「前処理」の作業が分析の基本である。「前処理」の結果に基づいて「多変量解析によるデータの要約」(樋口 2014:21)と分析者が作ったコーディングルールに従った分析ができる。本稿はソフト分析用のファイルとして、次頁の図1

が例示するようなデータのExcelファイルを用意した。

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	
1	ID	文字数	記事内容	題名	副題名	新聞	刊行年	刊行月	刊行日	版面	作者	作者分類	新聞分類	タイプ	
2	1	1660	「核 不 相 信」	扶起 “不 从”	梧州市 と中国	法治 社会	2008		4	26	1	李继远 陈世仁	新聞社記 者	地方紙・省	事件報道
3	2	892				工人	2009		6	2	3	郭文 その他	中央(全)	現象に対	

図1 分析データのExcelファイル一部の例示

図1が示すように、シートの一行目は変数ラベルであり、二行目から一行に一記事の情報を入力している。最後の「作者分類」、「新聞分類」、「タイプ」という3列は筆者が記事の情報に基づいて付け加えた内容である。分析の対象列は「記事内容」列である。

本稿で使ったソフトのバージョンは中国語テキストの分析に対応しているが、まだ実験的な段階にあるため、日本語ほど高精度かつ豊富な分析機能は揃っていない。「前処理」においては、中国語の特徴に適した文の分割と語の取り出しがまだうまくできていない。中国語では句点「。」によって文が区切られるが、KH Coderでは句点が識別されず、結果として文と段落が同一視されることになった。一方、語の取り出しにおいて、中国語は日本語のように基本形、活用形という語の変形がないため、品詞の種類が少なくなるが品詞の判別が難しくなり、語の取り出しに一定の影響を与えると考えられる。

本稿の考察は語用法まで分析を深めるわけではないため、名詞、動詞、形容詞のような基本の語の取り出しができれば本稿の分析には十分であると考えられるが、上記の点を注意しつつこれからの分析を進める。

4 分析と結果

4.1 データの記述と「前処理」の結果

分析の前にまずデータの記述統計を簡単に紹介する。下記の図2（左）は収集した新聞記事の年別件数の変化を示している。棒グラフは選別した新聞記事の各年の件数であり、折れ線はその件数がキーワード全文検索の結果に占める割合である。図2によると、「羅生門」問題に関する新聞記事（特に議論）は2008年に出現し、2011年の急増を経てそれ以降増減はあるが全体的に右上がりの傾向にあり、2015年に件数がピークに達している。

それに対して、表1（右）は筆者が新聞記事の内容に基づいて分類した記事タイプおよび各タイプの記事件数を示している。「ニュース報道」は単純に事件や対策などを報道する記事であり、議論の内容はあまりない⁴⁾。「議論」には5つのサブタイプがあるが、いずれも「羅生門」問題に関する議論主張の内容を含んでいるため、まとめて「議論」とした。「その他」の1件の記事は、「羅生門」問題の文脈は一切なく、お年寄りが転んだらどう対応すべきかを医学知識の側面から説明する内容である。

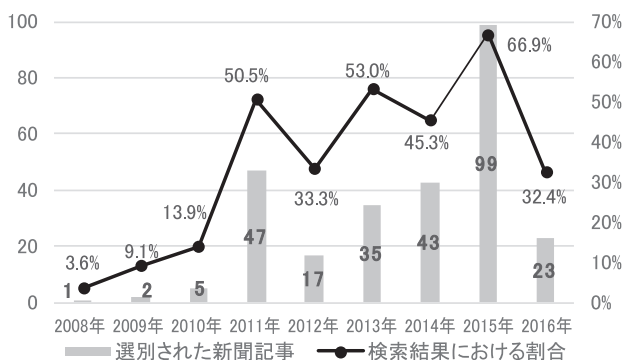


図2 新聞記事の年別件数及び検索結果における割合

表1 タイプ別の新聞記事件数

タイプ		件数
ニュース報道	事件報道	12
	対策報道	8
	問題への関心	2
議論	現象に対する論評	155
	人助けの宣伝	18
	調査結果	4
	対策に対する論評	60
	事件に対する論評	12
その他	医学的助言	1
合計		272

表1のタイプ別の記事件数から、前述したように「議論」タイプの記事が一番多いことが分かる。「羅生門」問題のクレーム申し立てを考察するために、議論の内容があまりない「ニュース報道」と「羅生門」問題の文脈がない「その他」の記事は分析に適切でないと考え、KH Coderの分析には「議論」タイプの計249件の記事を使用することにした⁵⁾。この249件の記事に対する「前処理」の結果は下記の表2(左)で示している。表3(右)は筆者が「前処理」の際に指定した強制抽出語のリストである⁶⁾。

ここで表2の「文章の単純集計」の結果について2点を説明しておく。まず、分割された文の数は段落と同じ結果になったのは、先述したソフトウェアの限界による。次に、H5という集計単位はソフトウェアが自動的に指定したもので、Excel表のセルを指している。すなわち、H5はここで記事という集計単位を意味している。表2の結果から分かるように、17140語がのちの分析に使用される。

表2 「前処理」の結果

総抽出語数(使用)	217666(126489)
異なり語数(使用)	18203(17140)
文書の単純集計	
文	2736
段落	2736
H5	249
出現回数分布	
異なり語数	17140
出現回数の平均	7.38
出現回数の標準偏差	40.26

表3 強制抽出語リスト

月	撞人者	中华民族
日	讹诈者	会不会
扶老人险	助人者	助人为乐
老年人意外伤害保险	摔倒者	乐于助人
好人条款	行善者	不敢
好人法	搀扶者	
老年人跌倒干预技术指南	救助者	
做好事	女大学生	
多一事不如少一事	中国人民大学	
见义勇为者	中国青年报	

4.2 「羅生門」問題に関するクレームの内容

「羅生門」問題をめぐって申し立てられたクレームの内容を考察するために、抽出語に基づいて語と語の共起ネットワークを確認した⁷⁾。その結果は下記の図3で示している。

図に出た言葉は頻出語であり、語を囲むバブルの大きさは語の出現頻度を表している。バブルが大きいほどその語の出現回数が高い。語と語の共起関係は図中の語の位置とは関係なく、語を繋げる線で表示される。線が太いほど共起関係が比較的強いと意味している。

図3は語の共起関係の上位100(E=100)を描画している。互いに共起関係が強い語に対してソフトが自動的に同じ色付けでグループ分けをしている。白黒印刷だと分かりにくいので、各グループにある主な頻出語およびその語の日本語訳を次頁の表4に整理した。なお、日本語訳はあくまでも語の意味を説明するための暫定的な訳であり、意味がほとんど同じである語はまとめて訳されている。

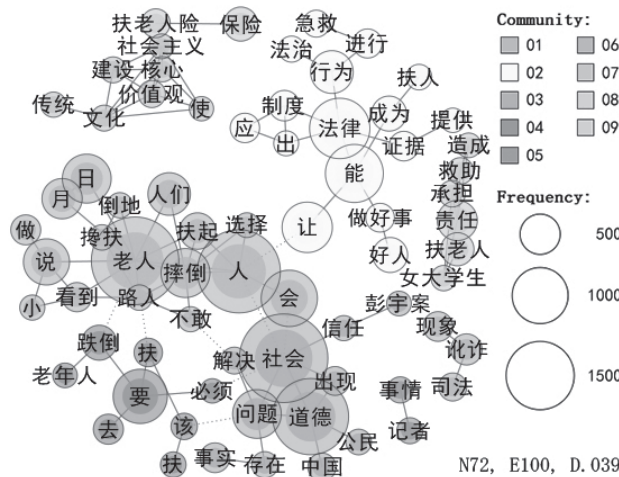


図3 語と語の共起ネットワーク

表4 各グループに属す主要な頻出語

Gr.1	Gr.2	Gr.3	Gr.4	Gr.5	Gr.6	
老人 摔倒、倒地 搀扶、扶起 路人 人们 不敬 看到	お年寄り 社会 道德 問題 解决 出现 信任 彭宇案 彭宇事件	社会 道德 問題 解决 生じる 信頼 彭宇事件	法律 制度 做好事 好人 人助けの人 让 能 出 证据 提供	法律 制度 去 老年人 跌倒 扶 要、该、必须 しなければならぬ 行く お年寄り 倒れる 助け起こす 扶	价值观 社会主义 建设 核心 文化 传统 价值观 社会主义 建设 核心 文化 传统	女大学生 扶老人 お年寄りを助け起こす 责任 責任を持つ 救助 救助 造成 引き起こす

表4の頻出語をもとに、KWIC (=Key Word In Context) コンコーダンスで語が出現した文脈を確認しながら、「羅生門」問題に関する議論を下記のようにグループごとにまとめた。ただし、グループ6は具体的事例に関する内容⁸⁾であるため、「羅生門」問題のクレーム内容としてはそれ以外の5つのグループの内容だけ挙げた。

- Gr.1 問題状態の記述 人々は倒れたお年寄りを見かけて、助け起こす勇気がない。
- Gr.2 道德面の批判 社会道德問題や社会信頼問題が生じる。問題を解決すべきだ。
- Gr.3 法律や制度の改善 人々に人助けをできるような法律や制度を出すべきだ。
救助者には自分の人助け行動に証拠を提供する義務はない。
- Gr.4 人助けへの呼びかけ 倒れたお年寄りを助け起こしに行かなければならない。
- Gr.5 伝統文化や価値観の宣伝 伝統文化の建設。「社会主義核心価値観」⁹⁾の建設。

4.3 クレームのレトリック

4.3.1 レトリックを考察するためのコーディング

レトリックへの考察は前提 (Grounds)、論拠 (Warrants)、結論 (Conclusions) という3つの側面から行う。前提は問題状態の記述である。ベスト (2013) によると、前提には名付け (naming)、典型例 (typifying examples)、統計結果 (statistics) などの提示が多く見られる。論拠は問題改善を正当化する理由であり、「価値や感情に訴える」(Best 2013:36)。結論は対処策についての提示である。

上記の3つの側面に対して、前節のクレーム内容を参考にしながらそれぞれコーディングを行った。下記の表5は作成した12個のコードおよびそれぞれのコーディングルールに関する簡単な説明である¹⁰⁾。

表5 コーディングルールに関する説明

コード名	コーディングルール	説明
*倒れたお年寄り	near (お年寄りを表す語-倒れることを表す語[d])	同じ段落に「倒れる」と「お年寄り」が一緒に出現すれば
*助けがない	助け起こすかどうかを表す語 or near (否定を表す語-助け起こすを表す語)	助け起こすかどうかを表す語が出現すれば、或いは助け起こすを表す語と否定の語が近い距離で一緒に出現すれば
*典型事例の引用	典型事例名 or 典型事例の当事者名	典型事例名や典型事例の当事者名が出現すれば
前提 *具体的事例の引用	seq (月-日) & <*倒れたお年寄り>	「○月×日」というフレーズと倒れたお年寄りへの言及と一緒に出現すれば
*統計データの引用	アンケート調査 or 社会調査 or 統計を表す語	左記の意味を表す語が出現すれば
*陥れられるリスクへの心配	near (心配を表す語-強請る、陥れることを表す語) or リスク or 代価	陥れることと心配と一緒に出現、あるいは「リスク」という語が出現、あるいは「代価」という語が出現すれば
*道德面の批判	道德低下や後退、信頼危機、信頼崩壊、人間関係の冷淡などを表す語	左記の意味を表す語が出現すれば
論拠 *伝統文化	伝統、美德、中華民族、勇敢に人を助けるなどを表す語	左記の意味を表す語が出現すれば
*価値観	社会主義核心価値観、雷鋒、安定な社会を維持するなどを表す語	左記の意味を表す語が出現すれば
*メディアや世論への批判	seq (メディアを表す語-(理性的、客観的、ミスリード)) and 少数を表す語	メディア報道が理性的であるべきだといったフレーズと「羅生門」事件が少数事件だと表す語と一緒に出現すれば
結論 *人助けを呼びかける	near (教育や実践や建設を表す語-(<*価値観> or <*伝統文化>)) or near (しなければならぬを表す語-助け起こす)	実践や建設などの語と価値観や伝統文化への言及と一緒に出現すれば、或いは助け起こすという語はしなければならぬを表す語と一緒に出現すれば
*法律や制度の改善	法律や制度を表す語 or seq (処罰を表す語-陥れる人を表す語) or seq (守るを表す語-救助者を表す語)	法律や制度、陥れる人を処罰するというフレーズ、救助者を守るというフレーズのいずれが出現すれば

表5が示しているように、前提に関しては、まず、直接に現象を記述する内容に「倒れたお年寄り」、「助けない」、「陥れられるリスクへの心配」という3つのコードを与えた。「彭宇事件」など多く議論された代表的な「羅生門」事例への言及には「典型事例の引用」というコードを、代表的な「羅生門」事例以外の事件報道への引用には「具体的事例の引用」というコードを与えた。「統計データの引用」は統計結果への引用である。名づけに関して、「倒れたお年寄り」や「助け起こすかどうか」という言葉自体はすでにこの問題を連想させる役割を果たしているため、あえてコードを与えなかった。

論拠に関しては前節のグループ2と5の内容に従い、「道德面の批判」、「価値観」、「伝統文化」という3つのコードを作成した。

結論に関しては、まず、前節のグループ3と4の内容に従い、「法律や制度の改善」と「人助けを呼びかける」という2つのコードを作成した。また、前節の分析結果に出ていないが、「羅生門」問題はメディアの報道バイアスによる産物だと主張している記事も見られるため、それらの内容には「メディアや世論への批判」というコードを与えた。

4.3.2 各コードの出現頻度およびコード間の関連性

まず、それぞれのコードは分析データにおいてどれほど出現しているのかを確認する。下記の表6はコーディングに対する単純集計の結果を示している。段落を単位に集計した結果は左で、記事を単位に集計した結果は右である。KH Coderのコーディング機能は集計単位に排他的にコードを与えるのではなく、代わりに要素を抽出してコードを与える。

表6では、集計単位における高い出現割合は灰色で示している。右の記事単位で集計した結果を見ると、出現割合の上位5つのコードはそれぞれ「助けない」(99%)、「人助けを呼びかける」(92%)、「倒れたお年寄り」(78%)、「陥れられるリスクへの心配」(70%)、「価値観」(65%)であることが分かる。この5つのコードは段落を単位に集計した結果においても上位5位にある。この結果についてレトリックの3つの側面から考えると、以下のよう

前提 典型例や統計結果への引用より、問題状態に対する直接の言及が圧倒的に多い。そのうち、倒れたお年寄りを助け起こさない、あるいは助け起こすかどうか迷うという現象への言及が最も多く、次は陥れられるリスクに関する内容である。

論拠 道德面の批判よりは価値観に関する言及が比較的多い。

結論 法律や制度の改善という具体的な解決策の提案よりは、直接人助けを呼びかける内容が多い。

表6 コーディングの単純集計

コード名	段落頻度	割合	記事頻度	割合
* 倒れたお年寄り	662	24.20%	195	78.31%
* 助けない	1415	51.72%	246	98.80%
* 典型事例の引用	137	5.01%	83	33.33%
* 具体的事例の引用	103	3.76%	107	42.97%
* 統計データの利用	42	1.54%	32	12.85%
* 陥れられるリスクへの心配	429	15.68%	175	70.28%
* 道德面の批判	228	8.33%	126	50.60%
* 伝統文化	308	11.26%	131	52.61%
* 価値観	346	12.65%	161	64.66%
* メディアや世論への批判	216	7.89%	121	48.59%
* 人助けを呼びかける	695	25.40%	230	92.37%
* 法律や制度の改善	202	7.38%	118	47.39%
# コード無し	590	21.56%	0	0.00%
集計単位総数	2736		249	

次に、各コード間の関連性を考察する。下記の図4は各コード間の共起ネットワークを示している。分析の際に、12個のコードに対して、Jaccard係数¹¹⁾で測定した上位60の共起関係を描画し、最小スパニング・ツリーだけを描画するように設定した。コードを囲むバブルの大きさはコードの出現頻度を表し、コードを繋げる線は共起関係を、線上の数字はJaccardの類似性測定値を示している。バブルの色付けは次数中心性を示し、コードに繋いでいる線が多いほどそのコードの色が濃い。

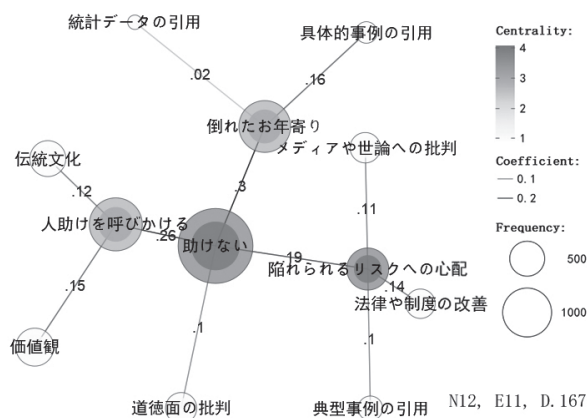


図4 コード間の共起ネットワーク

図4の結果から以下の4点が読み取れる。まず、次数中心性が一番高いコードは「助けない」と「陥れられるリスクへの心配」と2つがあり、そのうち「助けない」の方は出現頻度も一番高い。次に、問題状態の記述において、「具体的事例の引用」と「統計データの引用」は「助けない」と共起しているのに対して、「典型事例の引用」は「陥れられるリスクへの心配」と関連している。そして、論拠においては、「道徳面の批判」は「助けない」だけと共起している。最後に、結論の「法律や制度面の改善」と「メディアや世論への批判」という2つのコードはともに前提の「陥れられるリスクへの心配」に関連しているのに対して、「助けない」現象に関連している結論のコードは「人助けを呼びかける」である。しかし、後者の方は前者より関連性が強く、「人助けを呼びかける」コードの出現頻度も他の2つより高い。

5 結論と考察

「羅生門」問題のクレームの内容およびレトリックの特徴に関するこれまでの分析結果をまとめると下記の3点になる。

①クレームにおいて問題とされた状態は主に転んだお年寄りを助け起こさないという現象である。ただし、クレーム申し立ての際に、この現象を「羅生門」事例と関連付けて、「羅生門」事例に暗示された「陥れられるリスク」を助けない理由として挙げている。問題状態の記述においては、統計結果や典型例の提示も見られるが、「転んだお年寄りを助け起こす人がいない」というような問題状態への直接的な言及が圧倒的に多い。

②クレームの論拠においては、助け起こさないという現象に対する道徳面からの批判以外に、中国の伝統文化と社会主義的価値観の強調も見られる。特に価値観を強調する内容が道徳面からの批判よりも多く、論拠においては一番高い割合を占めている。

③クレームの結論においては、法律や制度の改善というような具体的な解決策の提示と比べて、漠然と人助けを呼びかける内容がより多く見られる。

上記の特徴に基づいて、「羅生門」問題がなぜ社会問題としてみなされるようになったのかということに対して、クレーム申し立ての側面から以下のような説明が付けられる。

問題のクレームは転んだお年寄りを助け起こさないという現象への批判であるが、問題状態の記述において、感情的に受け入れがたい「羅生門」事例と関連づけての提示は人々の関心を引き寄せたうえに、問題の図式を固

定化した。「陥れられるリスクがあるから助け起こす勇気がない」というような問題の図式を強調する言葉を頻繁に使用することで、個別事象を暗黙のうちに一般的現象へと変え、それに合わせて適宜典型例を引用して問題状態の「客観性」を築き上げた。この問題状態に対して、道徳面からの批判はもちろん、中国の伝統美德ないし社会主義的価値観に訴えて問題の改善を正当化しようとするレトリックは、中国の社会・文化的コンテクストにおけるこのクレイムの説得力を高めた。

この説明から、「羅生門」問題のクレイム申し立てはイデオロギー上の方向づけの色彩を強く帯びていることが分かる。特定の現象や状態を社会問題と見なすかどうかは、その社会に生きている人々の世界に対する理解によって大きく左右される。中国社会では社会主義的価値観と伝統美德への強調が常にあるからこそ、人々が転んだお年寄りを助け起こさないことに敏感である。イデオロギー上の方向づけの強調が強い社会・文化的コンテクストにおいて、その方向づけから背離する現象は容易に批判的になり、その現象を批判することによってイデオロギー上の方向づけがさらに強調されるのである。

そう考えると、結論にはスローガ的な人助けへの呼びかけが多いということも理解しやすくなる。なお、「羅生門」問題のクレイムはあまりカウンター・クレイムに遭遇せず容易に人々に受け入れられたのも、この社会・文化的コンテクストに関連していると考えられる。問題の形成過程におけるメディアや世論の偏りに対する批判はあるが、その批判も陥れられるリスクへの心配をなくすためであり、結果としては人助けへの呼びかけになる。

本稿は「羅生門」問題のクレイムの内容とレトリックに焦点を当て、この問題がなぜ社会問題としてみなされるようになったのかに対して、クレイム申し立ての側面から説明を試みた。しかし、新聞記事に対する計量テキスト分析の結果からは、個々のクレイムにおける具体的なレトリックの組み合わせや特徴については語れないため、将来的にはそのディテールへの考察を行うべきだと考えている。また、社会問題は様々な主体が参加するダイナミックな発展過程であるため、クレイム申し立てだけではなくほかの発展段階を含めた問題発展過程の全体に関する考察も今後の課題として残される。さらに、「羅生門」問題のレトリックにみられる社会・文化的コンテクストの影響は、中国社会のクレイム申し立て活動に一般的に観察できる特徴なのか、すなわち、中国社会における社会問題の形成メカニズムを解明するために、中国国内の複数の社会問題に対する比較研究も今後の研究課題である。

【注】

- 1) 2006年11月20日、南京市でバスから降りた彭宇 (Peng Yu) さん (26歳) がバス停で転んだ徐さん (64歳) を助け起こしたが、後に徐さんに医療費などの賠償金を請求され訴訟を起こされた。理由は彭宇さんが自分につかつたから自分が転んだのだという。裁判所の一審では彭宇さんが徐さんにつかつた事実を確証せず彭宇さんに医療費などの40%を負担するよう判決した。事件が彭宇さんの上訴を経て最終的に2008年に和解で終わり、事件の真相についても2012年に『瞭望新聞週刊』誌に掲載されたが、この事件で人助けをした人が陥れられるという考えが広まった。事件の詳細は下記のサイトを参照されたい。
<https://baike.baidu.com/item/%E5%BD%AD%E5%AE%87%E6%A1%88/10702516> 2018年8月26日閲覧
- 2) 中国全国の新聞を比較的網羅的に収録した唯一のデータベースである。中国国内で発行された500あまりの種類重要な新聞の、2000年から今までの学術的、文献的な記事を収録している。詳しくは下記をご参照されたい。<http://kns.cnki.net/kns/brief/result.aspx?dbprefix=CCND> 2018年8月29日閲覧
- 3) 新しいシステムで同じ条件で検索してみたら記事のヒット件数が急激に減ったということが生じた。ただし、収録された記事自体が削除されたのではなく、検索のヒット結果だけが変わったことが後で判明した。サイトのシステム更新については下記を参照されたい。
<http://piccache.cnki.net/index/images2009/other/2017/ZWGBGG/notice.html> 2018年8月29日閲覧
- 4) 「問題への関心」の2件の記事は、それぞれ「羅生門」問題が大学入試に出たことへの報道と、学生文章コンクールで「羅生門」問題をテーマにした文章が出たことへのニュース報道である。
- 5) この249件の記事のうち、特に複数の文章をまとめた形で文字数合計4000以上の記事が4件ある。4件とも「羅生門」問題に関する内容は記事の中の一文章のみである。直接に関係しない文章が分析の結果に影響を及ぼすことを配慮して、この4件の記事について「羅生門」問題に関する部分のみデータとして残した。
- 6) 語の取り出しにおいて分割があまりにも細かすぎることを避けるために、「前処理」の際に表3の語を強制抽出するように指定した。強制抽出語を選ぶために、最初に取り出した語のリストから、品詞別で出現回数が高い順で解釈の難しい語を見つける。それらの語の直前や直後に一番よく出た語を「コロケーション統計」による集計で確認し、前後の語と合わせて固有名詞や熟語であれば強制抽出語

妻「お年寄りを助け起こす羅生門」問題のクレーム申し立てへの考察

に決める。

- 7) 分析に使用する語を出現回数120以上の名詞 (Noun)、固有名詞 (ProperNoun)、形容詞 (Adj, JJ)、動詞 (Verb)、強制抽出語 (TAG) に指定した。分析対象の記事はすべて議論タイプの記事であるが、前述したように問題現象に関する議論は記事の一部だけの場合もあるため、分析の際に語に対する集計は「H5」という記事ではなく「段落」を単位にした。共起関係の絞り込みに関する計算は、「各文書中での語の出現回数の大小が重要になる場合」(樋口 2014:153) に使用されるとよいCosine係数を利用している。
- 8) 類出語はすべて2015年に起きた「安徽省女子大生のお年寄りを助け起こす羅生門」事件に関している。
- 9) 社会主義核心価値観は、中国共産党の第十八回全国代表大会 (2012年11月) において明確に定義され、それ以降広く宣伝された価値観である。その内容は「富强、民主、文明、和諧、自由、平等、公正、法治、爱国、敬业、诚信、友善」という24字で簡潔にまとめられている。
- 10) コーディングルールを作る際に、抽出語リストとKWICコンコーダンスの機能を使って特定の意味を表している語の検索を行った。KH Coderの中国語分析はまだ精度が高くないということを考慮してあまり複雑なコーディングをしなかった。それでもコーディングルールのファイルに語の羅列が多く、コーディングルール自体を載せる紙幅がないため、使った論理演算子を表5に簡単に提示することにした。
- 11) コード間の関連性の強弱を測定するために最初は「類似度行列」で確認した。各コード間の関連性はJaccardの類似性測定値で表し、「値は0から1までの範囲で変化し、同じ文書中に出現することが多いコード程関連が強い」(樋口 2014:185)。ただし、類似度行列の集計表はわかりづらいため、代わりに共起ネットワークを使用した。その際、距離を測定する係数はJaccard係数に指定した。Jaccard係数で測定した類似性の値は1に近いほど類似性が高い。

【参考文献一覧】

- Best, Joel, 2013, *Social Problems*, New York: W.W. Norton & Company, Inc.
- Blumer, Herbert, 1971, "Social Problems as Collective Behavior," *Social Problems*, Vol.18, No.3 (Winter 1951): 298-306.
- Fuller, Richard C. and Myers, Richard R., 1941, "The Natural History of a Social Problem," *American Sociological Review*, Vol.6, No.3 (Jun., 1941): 320-329
- 何晓惠, 2016, "扶老人" 事件的媒介镜像, 安徽大学博士论文.
- 樋口耕一, 2014, 『社会調査のための計量テキスト分析』株式会社ナカニシヤ出版.
- 宋盖峰, 2016, 扶老人案件的法律分析, 河北经贸大学博士论文.
- Spector, Malcolm and Kitsuse, John L., 1977, *Constructing Social Problems*, Menlo Park, CA: Cummings Publishing Company. (=1992, 村上直之, 中河伸俊, 鮎川潤, 森俊太訳『社会問題の構築—ラベリング理論をこえて』マルジュ社.)
- 张莉, 2014, "好人基金" 运行的伦理审视, 南京林业大学博士论文.
- 赵海龙, 2013, 道德行为的法律保护, 黑龙江大学博士论文.